

水稲品種「どんとこい」の作期、栽植密度および施肥に対する反応

[要約]「どんとこい」は分けつ旺盛で、早植えほど多収となるが、品質低下が見られ、移植適期は5月上・中旬である。栽植密度の影響は小さく慣行の21.2株/㎡が適する。耐倒伏性は高く多肥条件ほど多収となるが、籾数過剰は品質低下につながるため基肥窒素量は0.5kg/a、目標籾数は3万粒/㎡が適当である。

三重県農業技術センター・栽培部・作物栽培担当					連絡先	05984-2-6359	
部会名	水田・畑作物	専門	栽培	対象	稲類	分類	普及

[背景・ねらい]

コシヒカリが過度に集中している本県平坦地域の作期分散対策として多収で良食味の新品種「どんとこい」を平成7年度に奨励品種に採用した。そこで「どんとこい」の移植時期、栽植密度および施肥に対する反応を明らかにし、良質・安定栽培技術の確立に資する。

[成果の内容・特徴]

1. 移植時期が遅くなるにつれて長草少げつ型の生育相となり、ラグ期間は徐々に短縮され、6月上旬移植では最高分けつ期と幼穂分化期はほぼ同時期となる。移植から出穂までの日数は4月下旬移植で約90日、6月上旬移植で約70日である。4月下旬、5月中旬移植の主稈葉数は13葉であるが、6月上旬移植では0.5～1葉の減少が認められる。分けつは旺盛で、最高茎数は4月下旬移植および5月中旬移植では700本/㎡を越え、茎数確保は容易である(図1)。
2. 移植時期が早いほど穂数および籾数は確保しやすく安定多収であるが、4月下旬移植では青未熟粒と背白粒の発生が多く、整粒歩合が低下しやすいことから本県におけるどんとこいの移植適期は5月上・中旬である(表1)。
3. 密植ほど穂数は増加傾向にあるが、収量および品質に対する栽植密度の影響は小さく、慣行の21.2株/㎡が適する(表1)。
4. 耐倒伏性は高く、多肥にするほど長稈化するが倒伏は見られない。多肥ほど穂数および籾数は増加し多収となるが、籾数過剰は登熟歩合、千粒重および整粒歩合の低下につながることから整粒歩合80%以上を目標とする場合の必要籾数は3万粒/㎡であり、基肥窒素量は0.5kg/a程度が適当と考えられる(表1、図2、図3)。

[成果の活用面・留意点]

- ・本県における「どんとこい」の栽培指導の基礎資料として利用できる。
- ・登熟期が高温・多照な多収年次での試験であり、低温年での反応は未検討である。
- ・品質向上を目的とした施肥技術の検討が必要である。

[具体的データ]

表1 収量・収量構成要素および品質への影響(平成6・7年)

要因	水準	稈長	穂数	玄米重	千粒重	籾数	登熟	整粒
		(cm)	(本/m ²)	(kg/a)	(g)	(×100 粒/m ²)	歩合 (%)	歩合 (%)
移植時期 (月/旬)	4/下	73.2	380	62.5	21.4	319	82.9	69.0
	5/中	76.4	358	61.1	22.4	304	82.9	72.2
	6/上	76.4	357	57.6	22.4	274	85.8	87.5
栽植密度 (株/m ²)	18.2	76.1	351	61.3	22.1	306	84.9	75.1
	21.2	75.6	363	60.0	22.1	294	83.0	77.1
	24.2	74.2	380	59.9	22.1	297	83.7	76.5
基肥窒素 (kg/a)	0.3	72.3	345	56.3	22.4	271	85.4	75.1
	0.5	75.6	364	61.4	22.0	303	84.0	76.7
	0.7	78.0	385	63.6	21.8	323	82.2	76.9

耕種概要

移植方法: 稚苗手植え

4本/株

穂肥: 0.15+0.15kg/a

出穂期:

H6.4.28移植: 7.18

5.15移植: 7.27

6.1移植: 8.6

H7.4.28移植: 7.28

5.17移植: 8.2

6.1移植: 8.8

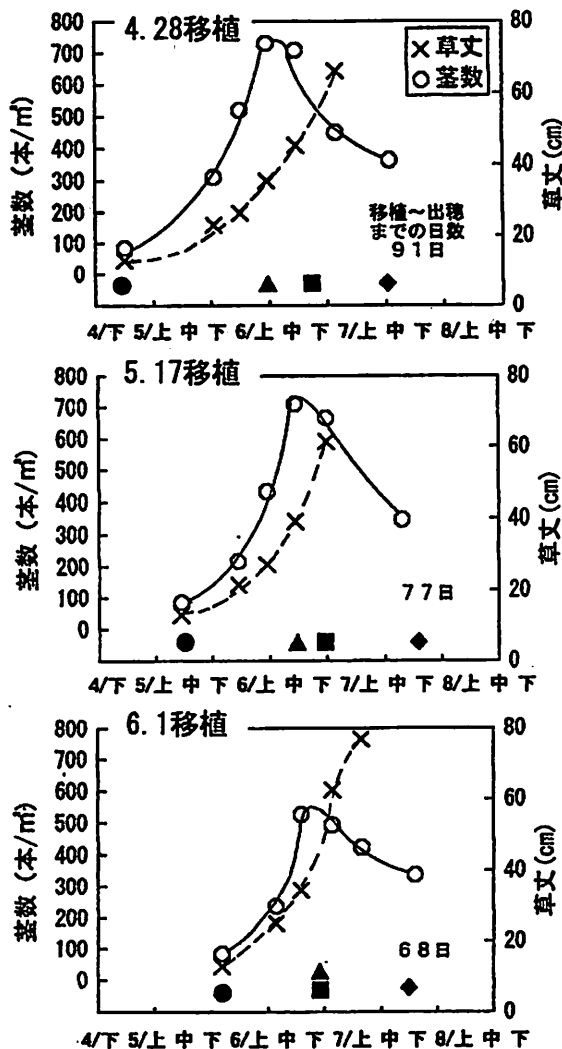


図1 移植時期別の草丈および莖数の推移(平成7年)

●移植日 ▲最高分げつ期 ■幼穂分化期 ◆出穂期

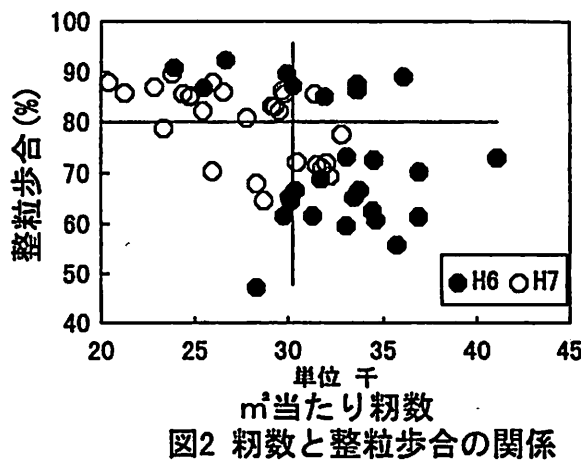


図2 籾数と整粒歩合の関係

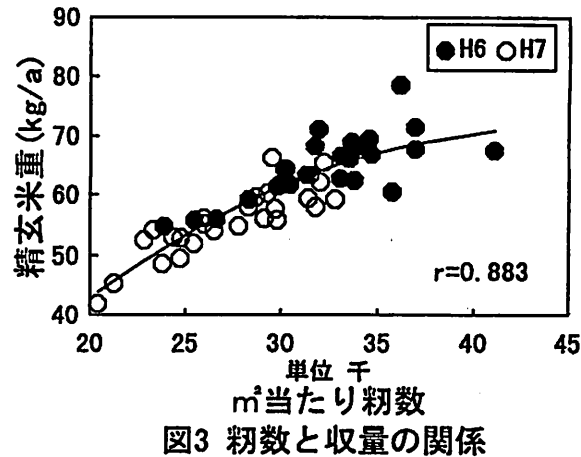


図3 籾数と収量の関係

[その他]

研究課題名: 水稻新品種の高産技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 平成7年度(平成6~7年)

研究担当者: 山中聡子、北野順一、神田幸英

発表論文等: 日作東海支部報121号(予定)